或る日

東京市京橋區昭和幼稚園　白根美智子

何かしら、力一ぱいのあそびがしたい。

砂場遊びも面白い。だが砂には抵抗力がない。遊戯も大好きだ。だが、それにはリズムがあり、定つたポーズがある。自分勝手に思ふ存分飛び跳ねる事は許されない。

滑り臺も愉快だ。のぼつては滑り降りる、滑つてはのぼる、いつ迄たつても飽きる事を知らない、だがたゞそれだけ。少しも變化がない。

歌を歌へば氣持は晴れる。けれど、歌ふ時にはお腹の中から湧き出る樣な聲を出すわけにはいかない。

積木あそび、これは、自分の身體の二倍も三倍もあるやうな大きい箱積木を、運ぶ、積む。勿論

私達の、僕等だけの世界で、力一ぱいの仕事がしたい。いや、しないでは居られない——。

面白い。全身の力と細心の注意とを小さい腕にこめて、一つ一つ重ね、並べてをくうちに、家が出來る、軍艦が出來る、汽車が出來る、家へ歸る事も忘れて眞冬でも汗みづくになつてあそぶ、その限りない愉快さだ。

でも――たまには何か違つた事もして見度い。何か、何か無いものかしら？

かうした子供達の心の要求を滿してやり度い、十二分に滿足させてやりたい、と慣れぬ手もて私は繩をかけ、布をなつて漸く作つた此のたるみこし。

見樣見眞似で、白鉢巻も甲斐々々しく、ワッショイワッショイと舁いで歩く。時々立止つては景氣をつけろ……」ッとおみこしを上下に大きくゆする。喜びに滿ちた元氣なその聲の間を縫つて、鈴の音が愛らしく響く。

初夏の雨あがりの强い陽射しが、コンクリートの運動場に痛い程照りつけて、子供達の頭も顏も玉の樣な汗だ。それを拭はふともしないで、時々ふいてやる間さへ待ち切れないほど――。

花がさをかぶつた女兒の引く太鼓の音が、ドーン〳〵と身體中に響き渡るのも快い。

「一寸そのまゝ待つて」と眞紅な顏が澄ましたところをパチリ。